

Botchan Chapter 11 (Natsume Sōseki)

あくる日眼が覚めてみると、身体中痛くてたまらない。久しく喧嘩をしつげなかつたから、こんなに答えるんだらう。これじゃあんまり自慢もできないと床の中で考えていると、婆さんが四国新聞を持ってきて枕元へ置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕様があるものかと無理に腹這いになって、寝ながら、二頁を開けてみると驚ろいた。昨日の喧嘩がちゃんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意気なる某とが、順良なる生徒を使喚してこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあって生徒を指揮した上、みだりに師範生に向って暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本県の中学は昔時より善良温順の気風をもって全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起ってその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢の上に加えて、彼等をして再び教育界に足を入るる余地なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸を据えたつもりでいる。おれは床の中で、糞でも喰らえと云いながら、むっくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の関節が非常に痛かったのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなった。

おれは新聞を丸めて庭へ抛げつけたが、それでもまだ気に入らなかつたから、わざわざ後架へ持って行って棄てて来た。新聞なんて無暗な嘘を吐くもんだ。世の中に何が一番法螺を吹くと云って、新聞ほどの法螺吹きはあるまい。おれの云ってしかるべき事をみんな向うで並べていやがる。それに近頃東京から赴任した生意気な某とは何だ。天下に某と云う名前の人があるか。考えてみろ。これでもれっきとした姓もあり名もあるんだ。系図が見たけりや、ただのまんじゅういらいせんぞひとりのこおが。——顔を洗ったら、頬ぺたが急に痛くなった。婆さんに鏡をかせと云ったら、けさの新聞をお見たかなもしと聞く。読んで後架へ棄てて来た。欲しけりや拾って来いと云ったら、驚いて引き下がった。鏡で顔を見ると昨日と同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

きょう　へきえき　がっこう　やす　いっしょう　なお　めし　く
今日の新聞に辟易して学校を休んだなどと云われちゃ一生の名折れだから、飯を食って
いちごう　しゅつとう　で　やつ　わら　なに
の一号に出頭した。出てくる奴も、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしい
きさまたち
んだ。貴様達にこしらえてもらった顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日
てがら　めいよ　ふしょう　そうべつかい　とき　なが　へんぼう　こころえ
はお手柄で、——名誉のご負傷でげすか、と送別会の時に撲った返報と心得たのか、いや
ひや　よけい　こと　い　えふで　な　おそれい
に冷かしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐めていろと云ってやった。するとこりや恐入
りやした。しかしさぞお痛い事でげしようとう云うから、痛かろうが、痛くなくろうがおれの面
だ。貴様の世話になるもんかと怒鳴りつけてやったら、向う側の自席へ着いて、やっぱりおれ
の顔を見て、隣りの歴史の教師と何か内所話をして笑っている。

やまあらし　しゅつとう　はな　い　むらさきいろ　ぼうちよう　ほ　なか　うみ
それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至っては、紫色に膨張して、掘ったら中から膿
で　み　うぬぼれ　かお　て　や
が出そうに見える。自惚のせい、おれの顔よりよっぽど手ひどく遣られている。おれと山嵐
つくえ　なら　とな　どうし　ちか　なか　ま　へ　や　とぐち　ましようめん
は机を並べて、隣り同志の近い仲で、お負けにその机が部屋の戸口から真正面にあるん
だから運がわるい。妙な顔が二つ塊まっている。ほかの奴は退屈にさえなるときとこつち
うん　みょう　ふた　かた　やつ　たいくつ
ばかり見る。飛んだ事と口で云うが、心のうちではこの馬鹿がと思ってるに相違ない。そ
れでなければああいう風に私語合ってはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると生徒は拍手
むか　せんせいばんざい　にさん　けいき
をもって迎えた。先生万歳と云うものが二三人あった。景気がいいんだか、馬鹿にされてる
んだか分からない。おれと山嵐がこんなに注意の焼点となってるなかに、赤シャツばかりは
へいじよう　とお　そば　き　さいなん　ぼく　きみら　たい　き　どく
平常の通り傍へ来て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対してお気の毒でなりませ
ん。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手続きにしておいたから、心配しな
くてもいい。僕の弟が堀田君を誘いに行ったから、こんな事が起ったので、僕は実に申し
わけ　ない。それでこの件についてはあくまで尽力するつもりだから、どうかあしからず、な
はんぶんしゃぎいてき　ことば　さんじかんめ　こうちようしつ　こま
どと半分謝罪的な言葉を並べている。校長は三時間目に校長室から出てきて、困った事を
新聞がかき出しましたね。むずかしくならなければいいがと多少心配そうに見えた。おれには
心配なんかない、先で免職をするなら、免職される前に辞表を出してしまっただけだ。しかし
じぶん　きじ　こうちよう　そうだん　せいご　もう　こ　てつづ　しんばい
自分がわるくないのにこっちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる訳だ
から、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務めるのが順当だと考えた。帰りがけに新聞
いじ　つ　じゅんどう　かんが　かえ
屋に談判に行こうと思ったが、学校から取消の手続きはしたと云うから、やめた。

やまあらし　こうちよう　きょうとう　じかん　あいま　みはから　うそ　いちおうせつめい
おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計って、嘘のないところを一応説明した。
しんぶんや　がっこう　うら　いだ　きじ　かか
校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨みを抱いて、あんな記事をことさらに掲げたん

だろうと論断した。赤シャツはおれ等の行為を弁解しながら控所を一人ごとに廻ってある
いていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したのを自分の過失であるかのごとく吹聴して
いた。みんなは全く新聞屋がわるい、怪しからん、両君は実に災難だと云った。

帰りがけに山嵐は、君赤シャツは臭いぜ、用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭い
んだ、今日から臭くなったんじゃないかと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわ
ざ、僕等を誘い出して喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜと教えてくれた。なるほどそこま
では気がつかなかった。山嵐は粗暴なようだが、おれより智慧のある男だと感心した。

「ああやって喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたん
だ。実に奸物だ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易く聴く
かね」

「聴かなくて。新聞屋に友達が居りゃ訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘をついて、事実これこれだと話しゃ、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れない
ね」

「わるくすると、遣られるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰っちまわあ。こんな下等な所に頼んだ
って居るのはいやだ」

「君が辞表を出したって、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証拠の挙がらないように、挙がらないようにと工夫するんだ
から、反駁するのはむずかしいね」

「厄介やっかいだな。それじゃ濡衣ぬれぎぬを着るんだね。面白おもしろくもない。天道是耶非てんどうぜかひかだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それでいよいよとなったら、温泉ゆの町まちで取とって抑おさえるより仕方しかたがないだろう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こっちはこっちで向むこうの急所きゅうしよを抑おさえるのさ」

「それもよかろう。おれは策略さくりやくは下手へたなんだから、万事ばんじよろしく頼たのむ。いざとなれば何でもする」

俺おれと山嵐やまあらしはこれで分わかれた。赤あかシャツが果たして山嵐はたの推察すいさつ通とおりをやったのなら、実じつにひどい奴やつだ。到底とうてい智慧ち比へべで勝かてる奴やつではない。どうしても腕力わんりよくでなくっちゃ駄目だめだ。なるほど世界せかいに戦争せんそうは絶たえない訳わけだ。個人こじんでも、とどの詰つまりは腕力わんりよくだ。

あくる日ひ、新聞しんぶんのくるのを待ちかねて、披ひらいてみると、正誤せいごどころか取り消としも見みえない。学校がっこうへ行いって狸たぬきに催促さいそくすると、あしたぐらい出だすでしょうと云いう。明日あすになって六号活字ろくごうかつじで小さく取ち消けが出でた。しかし新聞屋しんぶんやの方ほうで正誤むろんは無む論ろんしておらない。また校長こうちょうに談判だんぱんすると、あれより手続きてつづのしようはないのだと云こたえ答ただ。校長たぬきなんて狸かおのような顔かおをして、いやにフロック張はっているが存外ぞんがい無む勢せい力りよくなものだ。虚偽きよぎの記事きじを掲かげた田舎新聞いなか一つ詫ひとまらせる事ことが出来できない。あんまり腹はらが立たったから、それじゃ私わたしが一人ひとりで行しゆひつって主筆しゅひつに談判だんぱんすると云いったら、それはいかん、君きみが談判わんくちすればまた悪口あくぐちを書かかれるばかりだ。つまり新聞屋しんぶんにかかれた事は、うそにせよ、本ほん当とうにせよ、つまりどうする事ことも出来できないものだ。あきらめるより外ほかに仕方しかたがないと、坊主ぼうずの説教せつぎょうじみた説諭せつゆを加くえた。新聞しんぶんがそんな者ものなら、一日いちにちも早はやく打ぶつ潰つぶしてしまっただ方が、われわれの利益りえきだろう。新聞しんぶんにかかれるのと、泥鼈すっぽんに食くいつかれるとが似にたり寄よったりだとは今日こんにちただ今いま狸たぬきの説明せつめいによって始はじめて承知つかまつ仕しった。

それから三日みっかばかりして、ある日の午後ひごご、山嵐やまあらしが憤然ふんぜんとやっ来て、いよいよ時機きが来きた、おれは例れいの計けい画かくを断行だんこうするつもりだと云いうから、そうかそれじゃおれもやろうと、即座そくざに一いち味み徒党ととうに加盟かめいした。ところが山嵐きみが、君ほうはよす方がよかろうと首くびを傾かたむけた。なぜと聞きくと君きみは校長こうちょうに呼よばれて辞表じひょうを出だせと云いわれたかと尋たずねるから、いや云いわれない。君きみは？ と聴き

かえ きょうこうちょうしつ き どく じじょう しょけつ
き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんから処決してくれ
と云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓を叩き過ぎて、胃の位置が顛倒したんだ。君とお
れは、いっしょに、祝勝会へ出てさ、いっしょに高知のぴかぴかおどろきを見てさ、いっしょ
に喧嘩をとめにはいったんじゃないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せと云うがい
い。なんで田舎の学校はそう理窟が分らないんだろう。焦慮いな」

「それが赤シャツの指金だよ。おれと赤シャツとは今までの行懸り上到底両立しない
人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思ってるんだ」

「おれだって赤シャツと両立するものか。害にならないと思うなんて生意気だ」

「君はあまり単純過ぎるから、置いたって、どうしても胡魔化されると考えてるのさ」

「なお悪いや。誰が両立してやるものか」

「それに先だって古賀が去ってから、まだ後任が事故のために到着しないだろう。その上に
君と僕を同時に追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支えるからな」

「それじゃおれを間のくさびに一席伺わせる気なんだな。こん畜生、だれがその手に乗る
ものか」

翌日おれは学校へ出て校長室へ入って談判を始めた。

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合で……」

「その都合が間違^{まちが}ってまさあ。私が出さ^すなくて済むなら堀田^{ひつよう}だって、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明^{へん}が出来かね^{せつめい}ますが——堀田君^{で き}は去^さられてもやむをえんのですが、あなたは辞表^しをお出しになる必要^{みと}を認め^めませんから」

なるほど狸だ、要領^{ようりょう}を得^えない事ばかり並^{なら}べて、しかも落ち付き^お払^つってる。おれは仕様^{しやう}がないから

「それじゃ私も辞表^しを出^くしましょう。堀田君^く一人辞職^ひさせて、私が安閑^{あんかん}として、留^{とど}まっていられると思^{おも}っていら^しゃるかも知^しれないが、私にはそんな不人情^{ふにんじやう}な事は出来^しません」

「それは困^{こま}る。堀田も去^さりあなたも去^さったら、学校の数学^{すうがく}の授業^{じゆぎやう}がまるで出来^しなくな^らってしま^うから……」

「出来^しなくな^らっても私の知^しった事^じじゃありません」

「君^{わがまま}そう我儘^{わがまま}を云^いうものじゃ^ない、少^{すこ}しは学校^{じじやう}の事情^{じじやう}も察^{さつ}してくれなく^ちゃ困^{こま}る。それ^に、来^きてから一^い月^{げつ}立^たつか立^たないの^にに辞職^ししたと云^いうと、君^{しやうらい}の将^{しやうらい}来^{りれき}の履^{かんけい}歴^{かんけい}に^かん係^{けい}する^から、その辺^{かんが}も少^{すこ}しは考^{かんが}えたら^いい^いで^しやう」

「履^{かんが}歴^{かんが}なんか構^{かま}うも^んで^すか、履^ぎ歴^りより義^{たい}理^{せつ}が^大切^切です」

「そりゃごも^いつとも——君^いの云^いうところ^ちは一^い々^いごも^いつとも^だが、わたしの云^いう方^かも少^{すこ}しは察^{さつ}して^下さい。君^かが是^ぜ非^ひ辞職^しすると云^いうなら辞職^しされても^いいから、代^{かわ}りのある^まで^どう^かや^って^もら^いたい。と^にか^く、う^ちで^もう^一返^い考^{かんが}え^直して^みて^下さい」

考^{かんが}え^直す^つて、直^ちしよう^のない^めい^めい^はく^はく^りゆ^だが、狸^あが蒼^あくな^つたり、赤^あくな^つたり^して、可^{かわ}愛^い想^{そう}にな^つた^から^ひと^まず^考え^直す^事と^して^ひき^さ下^がつた。赤^あシャツ^あには^{くち}口^{くち}も^きか^なな^かつた。ど^うせ^遣つ^つける^なら^か塊^{かた}め^て、う^んと^遣つ^つける^方が^いい。

山^{やま}嵐^{あらし}に狸^もと談^{はな}判^なした^お模^お様^{かた}を^話したら、大^お方^おそ^おんな^か事^かだ^らう^と思^おつた。辞^し表^{ひょう}の^事は^いざ^となる^まで^その^まま^にし^てお^いても^さし^つか^ある^まい^との^話だ^つた^から、山^{やま}嵐^{あらし}の^云う^通り^にし^た。ど^うも^山嵐^{あらし}の^方が^おれ^より^も利^り巧^{こう}ら^{しい}か^ら万^{ばん}事^じ山^{やま}嵐^{あらし}の^忠告^{ちゆうこく}に^従う^事に^した。

やまあらし　じひょう　だ　しょくいんいちどう　こくべつ　あいきつ　はま　みなとや　さが
山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港屋まで下ったが、
ひと　し　ひ　かえ　ゆ　まち　ますや　おもてにかい　ひそ　しょうじ　あな　のぞ
人に知れないように引き返して、温泉の町の枡屋の表二階へ潜んで、障子へ穴をあけて覗
き出した。これを知ってるものはおればかりだろう。赤シャツが忍んで来ればどうせ夜だ。し
かも宵の口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極ってる。最初の二晩は
おれも十一時頃まで張番をしたが、赤シャツの影も見えない。三日目には九時から十時半ま
で覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿気た事はない。四五日す
ると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんのおありなのに、夜遊びはおやめたがえ
えぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違う。こっちのは天に代って誅戮を加
える夜遊びだ。とはいうものの一週間も通って、少しも験が見えないと、いやになるもん
だ。おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事をするが、その代り何によ
らず長持ちのした試しがない。いかに天誅党でも飽きる事に変りはない。六日目には少々い
やになって、七日目にはもう休もうかと思った。そこへ行くと山嵐は頑固なものだ。宵から
十二時過までは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯灯の下を睨めつきりである。おれが
行くと今日は何人客があつて、泊りが何人、女が何人といろいろな統計を示すのには驚ろ
いた。どうも来ないようじゃないかと云うと、うん、たしかに来るはずだがと時々腕組をして
溜息をつく。可愛想に、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生涯天誅を
加える事は出来ないのである。

ようかめ　しちじごろ　げしゆく　で　ゆ　はい　まち　けいらん　やっ　か
八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵を八つ買つ
た。これは下宿の婆さんの芋責に应ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂へ入れて、
例の赤手拭を肩へ乗せて、懐手をしながら、枡屋の櫓子段を登つて山嵐の座敷の障子を
あけると、おい有望有望と韋駄天のような顔は急に活気を呈した。昨夜までは少し塞ぎの
気味で、はたで見ているおれさえ、陰気臭いと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも
急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快愉快と云つた。

こんやしちじはん　こすず　げいしゃ　かどや
「今夜七時半頃あの小鈴と云う芸者が角屋へはいった」

あか
「赤シャツといっしょか」

「いいや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてって、ああ云う狡い奴だから、芸者を先へよこして、後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニッケル製の時計を出して見ながら云ったが「おい
らんぶ け づら ぼうずあたま うつ きつね うた
洋燈を消せ、障子へ二つ坊主頭が写ってはおかしい。狐はすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張の机の上にあった置き洋燈をふっと吹きけした。星明りで障子だけは少々
あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐は一生懸命に障子へ面をつけて、息を凝らして
いる。チーンと九時半の柱時計が鳴った。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭だぜ」

「おれは銭のつづく限りやるんだ」

「銭っていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十銭払った。いつ飛び出しても都合のいいように毎晩勘定する
んだ」

「それは手廻しがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝をするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮屈でたまらない」

「天誅も骨が折れるな。これで天網恢々疎にして洩らしちまったり、何かしちや、つまらないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小声になったから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子を戴いた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。ちが違っている。おやおやと思った。そのうち帳場の時計が遠慮なく十時を打った。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は半分静かになった。遊廓で鳴らす太鼓が手に取るように聞える。月が温泉の山の後のと顔を出した。往来はあかるい。すると、下の方から人声が聞えだした。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突き留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒下駄を引き擦る音がする。眼を斜めにするとやっと二人の影法師が見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫ですね。邪魔ものは追っ払ったから」正しく野だの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がな」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌の坊っちゃんだから愛嬌がありますよ」「増給がいやだの辞表を出したいのって、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思う様打ちのめしてやろうと思ったが、やっとの事で辛防した。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜って、角屋の中へはいった。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜かしやがった」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は二人の帰路を要撃しなければならぬ。しかし二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行って今夜ことによると夜中に用事が出て出るかも知れないから、出られるようにしておいてくれと頼んで来た。今思うと、よく宿のものが承知したものだ。大抵なら泥棒と間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、出て来るのをじっとして待ってるのはなおつらい。寝る訳には行かないし、始終障子の隙から睨めているのもつらいし、どうも、こうも心が落ちつかなくって、これほど難儀な思いをした事はいまだにない。いっその事角屋へ踏み込んで現場を取って抑えようと発議したが、山嵐は一言にして、おれの申し出を拒絶した。自分共が今時分飛び込んだって、乱暴者だと云って途中で遮られる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃げるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込めると仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事でとうとう朝の五時まで我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならぬ。温泉の町をはずれると一丁ばかりの杉並木があって左右は田圃になる。それを通りこすところかしこに藁葺があって、畠の中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のない、杉並木で捕まえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外れると急に駆け足の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚ろいて振り向く奴を待てと云って肩に手をかけた。野だは狼狽の気味で逃げ出そうという景色だったから、おれが前へ廻って行手を塞いでしまった。

「教頭の職を持つてゐるものが何で角屋へ行って泊った」と山嵐はすぐ詰りかけた。

「教頭は角屋へ泊って悪るいという規則がありますか」と赤シャツは依然として鄭重な言葉を使つてゐる。顔の色は少々蒼い。

「取締上都合だから、蕎麦屋や団子屋へさえはいつてはいかんと、云うくらい謹直な人が、なぜ芸者といっしょに宿屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がって「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、「いえ君の事

を云ったんじゃないんです、^{まった}全^てくないんです」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれはこの時^{とき}気がついてみたら、両手^{りょうて}で自分^{じぶん}の袂^{たもと}を握^{にぎ}ってる。追^おっかける時に袂^{なか}の中の卵^{たまご}がぶらぶらして困^{こま}るから、両手^{りょうて}で握^{にぎ}りながら来たのである。おれはいきなり袂^いへ手^てを入れて、玉子^{たまご}を二^{ふた}つ取り出して、や^とっと云いながら、野^のだの面^{かお}へ擲^{たた}きつけた。玉子^{たまご}がぐちゃりと割^われて鼻^{はな}の先^{さき}から黄味^{きみ}がだらだら流^{なが}れだした。野^のだはよ^{ぎょうてん}っぽど仰^も天^みした者と見^いえて、わ^いっと言^いいながら、尻^{しりもち}持^{もち}をついて、助^{たす}けてくれと云^いった。おれは食^くうために玉子^{たまご}は買^かったが、打^ぶつけるために袂^{わけ}へ入^いれてる訳^{わけ}ではない。ただ肝^{かん}癩^{しゃく}のあまりに、ついぶつけるともなしに打^ぶつけてしまったのだ。しかし野^のだが尻^{しりもち}持^{もち}を突^ついたところを見^みて始^{はじ}めて、おれ^{せいこう}の成^{せい}功^{こう}した事^{こと}に気^きがついたから、こん畜^{ちくしゅう}生^{せい}、こん畜^{ちくしゅう}生^{せい}と云いながら残^{のこ}る六^{むっ}つを無^{むちやくちや}茶^{ちゃ}苦^く茶^{ちゃ}に擲^おきつけたら、野^のだは顔^{かお}中^{じゅう}黄^{きいろ}色^{いろ}にな^なった。

おれが玉子^{たまご}をたたきつけているうち、山^{やま}嵐^{あらし}と赤^{あか}シャツはまだ談^{だん}判^{ばん}最^{さい}中^{ちゅう}である。

「芸^{げい}者^{しゃ}をつれて僕^{ぼく}が宿^{やど}屋^やへ泊^{とま}ったと云^いう証^{しょう}拠^こがありますか」

「宵^{よい}に貴^き様^{さま}のな^なじ^じみの芸^{げい}者^{しゃ}が角^{かど}屋^やへは^はい^いったのを見^みて云^いう事^{こと}だ。胡^ご魔^ま化^かせるものか」

「胡^{ひつよう}魔^ま化^かす必要^{ひつよう}はない。僕^{ぼく}は吉^{よしかわ}川^{くわん}君^{くん}と二^{ふたり}人で泊^{とま}ったのである。芸^{げい}者^{しゃ}が宵^{よい}には^はい^いろ^ろう^うが、^はい^いる^るま^まい^いが、僕^{ぼく}の知^しった事^{こと}ではない」

「だ^だま^まれ」と山^{げん}嵐^{こつ}は拳^く骨^{こつ}を食^くわした。赤^{あか}シャツはよ^よろ^ろよ^ろし^したが「これ^{らんぼう}は乱^{らん}暴^{ぼう}だ、狼^{ろう}藉^{ぜき}である。理^り非^ひを弁^{べん}じ^じないで腕^{わん}力^{りよく}に訴^うえ^えるの^{むほう}は無^む法^{ほう}だ」

「無^む法^{ほう}でた^たく^くさん^{さん}だ」とま^また^たぼ^ぼか^かり^りと撲^なぐる。「貴^き様^{さま}のよ^よう^うな^な奸^{かん}物^{ぶつ}はな^なぐ^ぐら^らなく^くち^ちや、答^{こた}え^えない^いんだ」とぼ^ぼか^かぼ^ぼかな^なぐる。おれも同^{どう}時^じに野^のだを^{さんざん}散^{さん}々^{ざん}に擲^{たた}き据^すえた。しま^すい^すには二^{ふたり}人^にとも杉^{すぎ}の根^ね方^{かた}にう^うず^ずく^くま^まって動^{うご}け^めない^いのか、眼^めが^にち^ちら^らす^する^るのか逃^にげ^げよ^よう^うともし^しない。

「もう^なた^たく^くさん^{さん}か、た^なく^くさん^{さん}で^{ふたり}な^なけ^けり^りや、ま^まだ^た撲^なつ^つて^てや^やる」とぼ^ぼか^かん^んぼ^ぼか^かんと両^{ふたり}人^にで^でな^なぐ^ぐつ^つたら「もう^なた^たく^くさん^{さん}だ」と云^いった。野^のだに「貴^き様^{さま}も^{むろん}た^たく^くさん^{さん}か」と聞^きいたら「無^む論^{ろん}た^たく^くさん^{さん}だ」と答^{こた}え^えた。

「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つつしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立っても正義は許さんぞ」と山嵐が云ったら兩人共だまっていた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時までは浜の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待ってるから警察へ訴えたければ、勝手に訴えろ」と云って、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ帰ったのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもしと聞いた。お婆さん、東京へ行って奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗って浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思ったが、何と書いていいかわからないから、私儀都合有之辞職の上東京へ帰り申候につき左様御承知被下度候以上とかいて校長宛にして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆である。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であった。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えなかったなあ」と二人は大きに笑った。

その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

清の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞆を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぽたぽたと落した。おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちをも持つんだと云った。

その後ある人の周旋で街鉄の技手になった。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくとも至極満足の様子であったが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹って死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお

寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云った。だから清の墓は小日向の養源寺にある。